

奈良・平城京跡・奈良町遺跡

1 所在地 一 奈良市今小路町、二 同高天町・高天市町・中筋町

2 調査期間 一 二〇〇五年(平17)五月～七月、二 二〇〇六年八月～二〇〇七年一月

3 発掘機関 奈良市教育委員会

4 調査担当者 一 中島和彦・武田和哉
二 中島和彦・池田裕英

5 遺跡の種類 都城跡・中近世都市跡

6 遺跡の年代 奈良時代～近代



(奈良)

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

一 左京二条七坊十五坪

(市五三二次調査)

調査地は、平城京跡左京二条七坊十五坪東半部のほぼ南北中央部にあたり、東京極大路である東七坊大路の西側に隣接する。平安時

代以降は「東大寺七郷」の一つ「今小路郷」として発展してきた。

今小路の地名は、天仁三年(一一一〇)の「僧勝俊家地売券」(「平安遺文」一七二二号)に「今小路北辺」として初めて現われる。また安永二年(一七七三)の今小路町を描いた絵図「今小路町北南両町大絵図券文」(天保四年(一八三三)写)には、現在と同じ町割りが見られる。この絵図によると、調査地は北から「小泉屋 赤兵衛」「菱屋 忠兵衛」「粕屋 又六」の三軒の宅地にあたる。

検出した遺構には、井戸・土坑・石組遺構・埋甕遺構・土器埋納遺構・柱穴などが約四〇〇基あり、奈良時代から江戸時代までの各時代にわたる。

木簡は、土坑SK〇三・SK〇七・SK三三四、溝SD二二から各一点、計四点が出土した。これらはいずれも江戸時代の遺構で、遺構番号は、発掘調査時の遺物取り上げの仮番号である。

SK〇三は、東西約三・五m南北約四・五m深さ約〇・二mの平面隅丸方形の土坑で、土坑の壁際の底には約〇・四～〇・六m間隔の杭列がある。一九世紀中頃の土器と瓦が出土している。塵芥処理用の土坑と考えられる。SK〇七は、東西約一・三m南北約〇・七m深さ約〇・一mの平面楕円形の土坑で、重複関係からSK〇三より古く、一七世紀中頃から一九世紀中頃のものと考えられる。出土遺物は少ない。SK三三四は、東西約〇・三m以上、南北約〇・五m以上、深さ約〇・六mの平面方形の土坑で、西側と北側の肩が

別の遺構により破壊されている。重複関係から、一八世紀前半の土坑より古い。出土遺物は少量の土器と瓦で、一三世紀以降のものである。SD二二は敷地西側奥を南北に横断する溝で、敷地中央寄りで鉤形に屈曲する。幅約〇・六―〇・八m、深さ約〇・二―〇・三mあり、中央部の西岸を長さ約五・五mにわたって石組みで護岸する。宅地裏側の排水溝とみられる。

二 左京三条六坊十坪（市五五九次調査）

調査地は、平城京跡左京三条六坊十坪の南西部にあたり、中世以降は興福寺を中心として発達した奈良町遺跡の中央に位置する。

検出した遺構は、井戸・土坑・柱穴・溝・石組遺構など約一二〇〇基あり、奈良時代から近代までにわたる。発掘区は高天町・高天市町・中筋町の三町にまたがり、町境の溝を検出するなど、町割りの変化が窺え、奈良町の変遷を知る上で良好な資料が得られた。

木簡は、一辺約二m深さ約〇・八mの隅丸方形の土坑から、陶磁器・鉄・ゴムなどともに一点出土した。また顔料入れと推定される白磁の製品が三〇〇点以上出土している。縦横約五・四cm×二・七cm、厚さ約一・〇cmで、底面を除き施釉する。時期は昭和二〇―三〇年頃と考えられる。

8 木簡の釈文・内容

一 左京二条七坊十五坪（市五三一次調査）

土坑SK〇三

(1) 「川口組

。今小路町
木綿屋佐兵衛

「菱太組
。口人

72×32×6 011*

土坑SK〇七

(2) 口口三斗口升

口口

(106)×(37)×9 081

土坑SK三二四

(3) 口口口口口口

179×97×7 061

溝SD二二

(4)

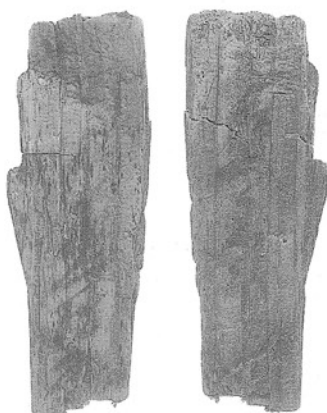
(墨線)
右三
北八

62×42×16 081

(1)は木札状の製品ではほぼ完存する。上端から一・〇cm下の中央部に径二mmほどの孔があり、表裏に墨書がある。「木綿屋佐兵衛」は、先述の江戸時代の絵図に、調査地の二軒北側の住人として見える。



一(1)
(赤外線画像)



一(2)



一(4)



二(1)

(2)は、歪な短冊型で、下半を欠損する。表裏に墨書があるが、用途は不明。(3)は完存する刷毛の柄のほぼ中央に、柄の先から刷毛方向に墨書する。(4)は用途不明の材で、四周いづれも欠損する。

二 左京三条六坊十坪(市五五九次調査)

(1) ・「五十本」

・「百本」

99×34×8 011

完存しており、周囲は削って仕上げる。表裏両面に墨書する。

(中島和彦)